

氏名： 内田 伸子 (UCHIDA Nobuko)
所属：
学位： 学術博士
職名： 理事・副学長
専門分野： 発達心理学・認知心理学
URL： <http://www.hss.ocha.ac.jp/psych/devpsy/home.html>
E-mail： uchida.nobuko@ocha.ac.jp

◆研究キーワード / Keywords

言語と認識の諸問題／言語・認知発達／コミュニケーション力／幼児の安全教育

◆主要業績総数（19）件

- ・大神優子・松尾香弥子・内田伸子・中井敏晴 (2007)「道具を操作する手の構えの神経基盤」『日本磁気共鳴医学会雑誌』 第 27 巻 1 号, p.29-32.
- ・内田伸子 (2007)「子どもの調査技法ー子どものウソ・発話プロトコルの分析法ー」『ケース研究』 292 号, 35-67.
- ・内田伸子 (単著) (2008)『子育てに「もう遅い」はありませんー心と脳の科学からわかる親が本当にすべきことー』成美堂出版 (全 223 頁) .
- ・内田伸子 (単著) (2008)『幼児心理学への招待 [改訂版]ー子どもの世界づくりー』サイエンス社 (全 344 頁)
- ・内田伸子 (編著) (2008)『よくわかる乳幼児心理学』ミネルヴァ書房 (86 頁／全 204 頁中) .

◆研究内容 / Research Pursuits

19 年度の主要テーマは以下の 3 点である。

- (1) グローバル COE プログラム「格差センシティブな人間発達科学の創成」採択され、国際格差班の事業推進者として幼児の読み書き能力の獲得と学力（論述・論理力）の関係についての国際比較研究（日・韓・越・中の国際比較研究）に着手した。
- (2) リスク社会における子どものコミュニケーション力の発達について実験研究を行った。
- (3) 幼児の安全教育に関する社会文化的要因の影響を解明するため、子どもの危機管理・安全教育をめぐる問題を診断し、望ましい子育て方策や安全教育の臨床支援プログラムを開発し、17-19 年の 3 年間の成果のとりまとめを行った。

★成果の検証：国際協力事業：16-18 年にかけて開発した海外調査基盤 (B) 幼児教育途上国支援「お茶大モデル」に基づき JICA の支援を受けて、1 か月間の「中西部アフリカ幼児教育研修会」を実施した。

- (1) This year The Global COE Program has started its first stages of research for the Global COE Program “Science of Human Development for Restructuring the ‘Gap-Widening Society’” I started the cross-cultural studies about the relationship between literacy acquisition and cognitive development among Japan, Korea, Vietnam and China.
- (2) Experimental studies examining the development of communicative abilities of children raised in risk societies were conducted.
- (3) Programs promoting safety education and ideal parenting skills were designed and implemented in order to elucidate how social and cultural factors affect safety education for children and illuminate the problems surrounding risk management and safety education, and the results of the project was written up and reported.

International Cooperation:

I proposed “Ochanomizu University Model for Young Children’s Education in developing countries, and applied the Model to International cooperation of the Middle-West countries of Africa.

◆教育内容 / Educational Pursuits

学部教育：

「発達心理学概論」、「人間と情報」の講義では、内容知識を伝えると共に、批判的思考力の育成をめざした授業方法をとっている。授業終了前の3分間作文を授業者の回答をつけて翌週にフィードバックすることにより、受講者の省察に寄与すると共に、一斉教育では双方向学習や学生同士の互惠学習が起こりにくいという弱点を克服するのに効果的であった。卒論指導した学生1名は大学院前期課程に進学し、桜蔭会奨学金「優秀賞」を授賞した。

大学院教育：

大学院前期・後期課程の院生の指導に力を入れた。個人指導と論文指導ゼミを組み合わせ修士論文（主査1名・副査7名）と博士論文の研究を指導（18名）した。主査4名、副査3名に博士号の学位を取得させた。心理学コースの教員全員の共同指導ゼミ「ランチトーク」では副主任指導院生に対する研究指導とプレゼンテーション能力の育成に取り組んだ。

Undergraduate education:

In the lecture-based classes of “Introduction to Developmental Psychology” and “Humans and Information,” there is a dual focus of training the students to understand the material, as well as fostering critical and analytical thinking skills. Lectures are scheduled to end 3 minutes, students are asked to record their comments, thoughts, and questions regarding the day’s lecture on a sheet of B6-size paper. This was effective in overcoming the often unidirectional nature of lecture-based classroom education, and promoting a bidirectional flow in education by allowing the students to take part in their own learning process.

Graduate school education:

Extra attention was given to graduate students just starting their research, as well as those finishing up their dissertations. In order to advance the graduate students’ research for their masters (including 1 principal investigators and 7 secondary investigators) and doctoral (18 students) theses, one-on-one training was combined with seminars on research methods and “lunch talks” on the techniques of giving effective presentations. A total of 4 principal investigators and 3 secondary investigators earned their degrees.

◆研究計画

【共同研究】

- (1) ベネッセ：メディアミックス教材（子どもの創造的想像力の発達を促し、母子コミュニケーションを活性化するためのメディアミックス教材）を開発し、幼児2人に1人が活用中。
- (2) セガトイズ：ビデオゲームソフト「ビーナ」に引き続き、生活習慣の自立を促す教育ソフト「ミッフィー」を開発し、モニター調査を踏まえて親子のコミュニケーションを活性化演出技法を確立した。
- (3) 講談社：幼児アニメ「ミッフィー」を開発と監修。NHK『おかあさんといっしょ』で放映中。

【将来の研究計画・研究の展望】

- (1) ゲームやビデオへの接触が子どもの発達にどのような影響を与えるかについて行動学的アプローチと縦断研究を組み合わせた研究を推進する。
- (2) 子どもの危険認知の発達や危険回避方略、コミュニケーション能力の発達について脳科学と行動学的アプローチにより解明する。

【共同研究可能テーマ・今後実用化したいテーマ】

- (1) 子どものメディア環境のデザイン；子どもの発達に資するメディア環境のデザインについて提言。
- (2) 幼児の安全教育についての総合的研究；子どもの危険認知の発達や危険回避方略の発達についての基礎的知見を踏まえて、子ども自身が自律的に安全に配慮できるようにするために環境設定や大人の教育的働きかけについて提言する。さらに3年間に渡る研究の成果を踏まえた研究集会と「命の教育」の講演会を開催する。

◆メッセージ

発達心理学は人が持つ能力のすべてを扱います。そしてそれらの力の萌芽は、乳幼児期に現れるため、乳幼児を対象とする発達心理学の研究テーマには、無限の広がりがあるといっても過言ではありません。心理学だけでなく、生理学、生物学、言語学、社会学など幅広い学問と結びつきながら、今後も活発な研究が行われていくことでしょう。

あなたは人の振る舞いをみて不思議だなんて思ったことはありませんか？なぜそんなことをするのか、どうしてこんなことが起こったのか？答えをさがすときには、まず我が身をふりかえってください。最初の被験者はあなた自身なのです。困ったときどうするか、どんな気持ちになったか、どのようにして解決策をみつけたか、我が身をふりかえり、じっくりと自己内対話を交わしてみてください。「なぜ？」の答が自ずと見えてくるでしょう。

発達心理学は面白い。人の心の不思議を解き明かすには「発達」や「進化」の視点をもつことが必要です。自分の子ども時代を発見する旅、「発達心理学村」をいっしょに旅しませんか。わくわくするような「名所」や美しい「景観」をご案内し、感動的な「見所」へと同行させていただきます。